

## 「舞妓を受け継いだ少女」

キヤノン・ギャラリー

世界でもよく知られた『舞妓さん』ですが、飾り物ではなく、生の言葉遣いや心遣い、生活様式を脈々と受け継ぎ、おもてなしの文化を受け継いでいる彼女たちに出会おうと思ったら、世界広しといえども、京都の5花街をおいて他にはありません。舞妓さんでいられる期間は長くて約5年。つまり5年間花街に舞妓さんになりたいという少女が現れなければ、その瞬間にこの文化は潰えてしまうのです。21世紀の今になっても「舞妓さん」が受け継がれていることに、大きな感動を覚えます。

私は、メキシコという国で約10年を過ごしたのですが、その間、何度も日本人や日本文化について意識させられました。特に興味を持ったのが、日本の美意識、そして日本の服である着物でした。「着物を普段から毎日、日常生活の中で着ている人を観たい、そしてできたら、そこで出会う美しさを撮影してみたい」。それが、私が花街に興味をもった一番初めのきっかけでした。そうして縁あって、宮川町の置屋『花傳』で撮影させてもらうようになり、すでに約8年が経ちました。この間で最も大きな出会いの一つが、今回の主人公である小桃さんとの出会いでした。花傳で撮影しはじめてまだ日も浅いころ、やはり帰国子女だった彼女が花傳にやってきました。まだ、父親の仕事の関係で中国に住んでいる最中で、しかし一時帰国を利用して体験修行にやってきましたのでした。少し話をしただけで、花街へ惹かれる我々二人の心の襞に、同質のものを感しました。彼女が中国へ一旦戻ると、私はすぐに彼女が中国で暮らす姿を撮影しに北京へ渡りました。「この子は絶対に舞妓になる」、という確信が私にはありました。「ならば、舞妓になる前の、まだ一般人であるときの姿を撮っておきたい…」、そう思ったのでした。

程なくして、日本に帰国した彼女は、反対する両親を説得し、花傳へ正式に見習としてやってきました。私はその後、見習い姿から始まり、舞妓になる見世出しの日、舞妓の約5年間の日々、芸妓になる襟替えの日、そして芸妓の日々と、今も撮影を続けています。この中で特に舞妓の部分を中心にまとめたのが今回の写真展です。

ハリウッド映画の『さゆり』は、外国人が過去を舞台に描いた造作でしたが、この『舞妓を受け継いだ少女』は現代を舞台にしたノンフィクション作品です。私が心を動かされた花街での暮らしの一瞬一瞬を、そして稀有な少女の成長の一瞬一瞬を捉えた作品です。花街の中で成長していく小桃さんの姿から、一人の少女が大人の女性に成長していく様子や、花街のくらしに宿る美しさなど古くから、受け継がれてきた「生きた日本文化」の薫りを感じていただければ幸いです。

最後に、花傳の小糸さん、小桃さん、小扇さん、弥千穂さん、弥寿葉さん、小凜さん、そして宮川町関係者の皆様、それから私の周りで支えてくれる友人、家族に深く感謝します。

2007年1月 荻野NAO之